

**世界の人びとのための J I C A 基金活用事業
終了時活動報告書 (2024 年度採択案件)**

1. 業務の概要	
(1) 案件名	多文化親子ひろば～つながろう！ひろげよう！こどもの輪～
(2) 実施団体名	一般社団法人磐田国際交流協会
(3) 実施期間	2024 年 11 月 18 日 ～ 2025 年 3 月 14 日
(4) 実施国	日本
(5) 活動地域	静岡県磐田市福田地区および周辺地域
(6) 活動概要	
<p>①活動の背景：</p> <p>磐田市の南部に位置する福田（ふくで）地区に居住する外国人の数は、2018 年 517 人、2022 年 956 人と約 2 倍に増加している。また福田地区の 2 校の小学校でも 2023 年度の要日本語指導の子どもの割合は約 11.2%となり市内でも非常に高い割合となっている。</p> <p>学校生活においては、ことばの壁や幼少期の生活体験の不足、集団生活の経験が乏しいことで学校生活への適応や学習の積み上げに困難が生じるケースや、受け入れる子どもたちやその地域も外国につながる子どもたちがかかえる背景や状況を理解しきれずに、学級や地域で孤立してしまうケースが見受けられる。</p> <p>このような状況をふまえ、福田地区および周辺地域にて外国につながる親子と地域の親子がつながる居場所づくりをする。</p> <p>②活動の目標：</p> <p>就学前の外国につながる子どもたちと日本人の子どもたち、およびその保護者がさまざまな生活体験や文化体験を通して互いに交流する機会をつくり、磐田市内の外国人集住地域において多文化共生社会の構築を図る。</p> <p>また外国につながる親子には、就園や就学を見据えて日本の教育制度に関する情報提供を行い、子どものキャリア形成について早期に考え行動するきっかけを提供する。</p> <p>子どもの国籍やルーツ、年齢、家庭環境を問わず、親子の時間をつくって一緒にさまざまな体験をすることの大切さを再認識してもらえようような活動を目指す。</p>	

2. 業務実施結果

(1) 実施した内容

就学前の親子対象の体験型交流プログラム

【多文化親子ひろば】の企画・開催

第1回：スポーツ／教育

■2024年11月24日（日）

「スポーツをしよう／教育について知ろう」

講師：NPO法人スポーツコミュニティ磐田・ポータルスター

高橋 亮祐氏

浜松いわた信用金庫 相川 アンジェラ氏

目的：体を動かす楽しさを知る／教育に関する情報提供を行う
幼児向けスポーツプログラムの講師を招き、親子で楽しめる
運動遊びを実施した。保護者は教育制度や教育資金等についての
講座にも参加し、早期から子どもの教育に関心をもち、
ライフプランニングをする大切さを学んだ。

第2回：アート

■2024年12月8日（日）「工作をしよう」

講師：磐田市立福田図書館職員

目的：ハサミやのり、色鉛筆などの道具を使うことで指先を使う訓練をする

図書館の職員を講師として招き、「紙コップロケット」を作り、制作に使った紙コップや輪ゴムにまつわる絵本の読み聞かせも行った。はさみを初めて持つ子どももいて、親子で一つの作品を作りあげる体験をした。

第3回：食育

■2025年1月12日（日）「栄養のお話を聞こう／お弁当をつくろう」

講師：NPO法人こどもの森 吉田 隆子氏・谷川 照代氏、磐田市健康増進課職員

目的：栄養バランスのとれた食事の大切さを学ぶ／子どものお弁当の作り方を知る

3名の管理栄養士の方に講師をお願いして、食育講座を開催した。はじめに、幼児向け栄養講座で栄養バランスのとれた食事の大切さを確認し、お弁当調理を開始。幼児、小学生、大人の各セクションに分かれて作業を分担し協力し合いながら、栄養バランスのとれた美味しいお弁当を作った。

第4回：日本文化

■2025年2月9日（日）「日本文化を体験しよう」

講師：一般社団法人学び舎フレンドシップ 匂坂 正代氏

目的：小学校で習う「書道」の先取り体験をする。日本文化に触れる。

元小中学校教諭の方々に指導いただき、筆、墨や半紙など本物の道具を使って、こどもは好きな絵や形、大人は日本語の文字やことばを書く体験をした。最後に家族ごとに前に出て、みんなの前で発表した。



第5回：ダンス／音楽

■2025年3月2日（日）「みんなで ZUMBA®を踊ろう」

講師：ZUMBA®インストラクター 野村 由起氏

目的：様々なジャンルの音楽やリズムに合わせて体を動かす。

ZUMBA®インストラクターの方に幅広い年齢層の参加者が楽しめるダンスプログラムを特別に用意していただき、音楽やリズムに合わせて体を動かした。途中、簡単な制作活動（紙皿のマラカス作り）も行い、最後にその楽器を使いながら楽しく踊り、参加の記念として終了メダルを授与した。

（2）実施成果：

【受講者数】

第1回	外国ルーツ子ども：8人	外国ルーツ保護者：10人	（ブラジル、ベトナム、中国）
	日本人子ども：8人	日本人保護者：5人	計 31人
第2回	外国ルーツ子ども：3人	外国ルーツ保護者：4人	（ベトナム）
	日本人子ども：6人	日本人保護者：5人	計 18人
第3回	外国ルーツ子ども：11人	外国ルーツ保護者：12人	（ブラジル、ベトナム、中国）
	日本人子ども：12人	日本人保護者：6人	計 41人
第4回	外国ルーツ子ども：3人	外国ルーツ保護者：4人	（ベトナム、中国）
	日本人子ども：7人	日本人保護者：6人	計 20人
第5回	外国ルーツ子ども：2人	外国ルーツ保護者：2人	（ベトナム）
	日本人子ども：8人	日本人保護者：6人	計 18人

【受講者の声】

様々なルーツをもつ親子が集まり一緒に活動することができた。また、対象年齢（3歳～5歳児）以外の乳児や小学生の参加もあり、企画が難しい部分もあったが、できる限り家族全員が楽しめるプログラムを考え、託児サービスなども検討しながら安全面にも配慮し実施することができた。受講者からは、「思い切って参加して良かった」「楽しかった」「外国人ともっと交流したい」「他にもいろんな体験をしてみたい」という意見が出た。

【地域における多文化共生意識の啓発】

各回の講師や支援者、ボランティアもできるだけ市内在住者を起用し、同じ地域で暮らす外国につながる方たちと交流が持てるように工夫した。講師の方からは「普段自分たちが行っている活動を通して、地域の多文化交流や多文化共生社会の構築にもっと寄与できないかを考えるきっかけとなった」などの声をいただいた。

【主催者としての学び】

主催者である私たちも、当事業の参加者（受講者、講師、支援者の方たち）と繋がったことで、就学前の親子や地域の人たちの多文化共生に対する意識や取り組みの現状などを知ることができ、今後の事業展開のために重要なはじめの1歩を踏み出すことができた。

また、子どもたちがニコニコ笑ったり、時には泣いてしまったり、真剣に取り組んでいたり様々な表情を見せてくれて、また保護者も一緒に楽しんでくださり、単発ではなく5回の通し講座を企画

したことの手ごたえも得られた。

(3) 得られた教訓など：

事業を開始するにあたり、最初に直面したのはイベント情報の周知の難しさであった。「この企画を特に誰に届けたいのか？」そして「どこにどのタイミングで情報を持っていけばいいのか？」が十分に明確になっておらず、広報活動が難航した。今後は、早期に情報伝達のルートを確保して、タイミングを逃すことなく計画的に準備していくことが必要だと学んだ。

いざ募集を始めると、対象年齢以外の乳児や小学生の子どもの兄弟がいる家族からの申込みも多く、特に調理や運動遊びなどの危険を伴う活動の際には内容を何度も練り直す必要があった。それでも何かを諦めるのではなく、対象である「就学前の子ども」に軸を置きながらも、家族みんなで参加でき、それぞれが楽しめる活動内容を考えていくことがとても大切であることを学んだ。無理難題を受け入れていただき、共に頭をひねりながら活動内容を考えくださった講師の方々、また様々な年齢層の子どもたちの活動を見守ってくれた幼児ケアアドバイザーの方々、中学生をはじめとするボランティアや託児サービスの保育士の方々には大変感謝している。

また参加者からのフィードバックにもあったが、もっと家族同士が繋がれるプログラムを用意できると良かった。実際には家族単位での作業・活動が多く、「お隣さん同士の交流」が少なかったと思う。事前に座り位置を指定したり、グループを編成したりして、他の家族と一緒に作業ができるような仕掛けが必要だと感じた。内容も、参加者同士のコミュニケーションを重視したものを講師の方々に考案していただけるよう依頼することが重要である。

上記の課題等を踏まえると、やはり私たち単独ではできることに限りがあると感じたため、行政各課や幼保こども園、さらには教育委員会等とのさらなる連携が必要不可欠であることも再確認した。

(4) 今後の活動・フォローアップの方針：

【行政各課との連携】

- ・今年度事業報告および更なる情報・課題共有、共同企画・実施、周知協力等の要請を行っていく

【「多文化親子ひろば」の継続開催】

- ・今年度の教訓や参加者からの声を活かしてより良い活動を目指す

【未就園児（3～5歳児で幼保こども園に在籍していないこども）のサポート体制強化】

- ・幼保こども園からはアクセスができない、未就園児へのアプローチを検討する
- ・「多文化親子ひろば」への参加を促す
- ・就園に必要な情報提供や手続き等のフォローを行う

【子育てや教育に関する情報の周知徹底】

- ・対象者のライフスタイルに合った情報が行き届いているのか調査・分析する
- ・調査・分析結果をもとに、情報発信の手段等を検討する

3. その他(エピソード・感想・写真など)

(1) 活動中のエピソード・感想など

当事業の企画段階では人が集まるかどうか不安だったのだが、日本人家族からの一般申込みも多く、外国人親子と交流したいと考えている親子がいることが分かった。第3回のお弁当作りの活動では、一つの調理台に日本人保護者と外国人保護者を配置してみたが、どのグループも会話を楽しみながら協力して調理を進めており、「一度卵焼きを作ってみたかった」というベトナム人のお母さんに、「作ってみて!」と巻き方のコツを教えて一緒に作る日本人のお母さんもいて、交流を楽しむ様子が至る所に見られた。この活動は参加者からも好評で、「今度は外国の料理を一緒に作ってみたい」「もっと外国の人たちと交流したい」等の感想が寄せられた。この回の進行手法が他の回にも活かせると、もっと交流が生まれるのではないかと感じた。

また先述のとおり、参加対象年齢以外の1~2歳児や小学生の参加があったため活動内容を大幅に変えるべきか非常に悩んだが、保護者も子どもも全員が楽しめるプログラムを何とか作りたいと考え、各回の講師と策を練りながら活動計画を立てた。難しいこともあったが、同時にやりがいも感じる事ができた。

1~2歳児の安全に配慮するため、第3回の食育と第5回のダンス/音楽の活動では託児サービスを利用した。その結果、対象年齢の子どもとお父さんやお母さんにも思いっきり活動を楽しんでもらうことができた。小学生については幼児向けの内容では物足りないため、第3回の食育の際には、小学生だけのグループを作り、1人の講師がついて家庭科の授業さながらの調理体験ができたことも大変良かったと思う。活動を進めるうちに子どもたちの集中力の持続時間も分かってきたため、第4回、第5回の活動時には折り紙や塗り絵、絵本を読んだりできるようなスペースも準備するなど、子どもたちを飽きさせない工夫を施すことも非常に楽しくやりがいがあった。

(2) 活動の写真



【スポーツをしよう】

コーンを起こす子は「Bom dia!」(訳:おはよう)、倒す子は「Boa noite!」(訳:おやすみ)と言いながら数を競い合う。



【教育について知ろう】

子ども一人あたりの教育費の総額に驚いた受講者の皆さん、ライフプランニングの大切さを再認識。



【工作をしよう】

はじめにはさみを持つ子もいたけれど、自由に装飾をして、自分だけのオリジナルロケットが完成！
作ったロケットを発射台にセットして飛ばし、高さを計測。



【栄養のお話を聞こう／お弁当をつくらう】
就園・就学に向けてお弁当づくりを体験。



お弁当の献立：

- 鶏肉とパプリカの炒め物
- ジャガイモとベーコンの重ね焼き
- ブロッコリーのゆずドレッシングがけ
- 卵焼き
- 菜飯のスティックにぎり



【日本文化を体験しよう】

筆や墨をつかって本格的な書道体験。クレヨンや鉛筆とは違う書き味を楽しんだ子どもたち。



【みんなで ZUMBA®をおどろう】

音楽に合わせて思いっきりダンス！自作の紙皿マラカスや修了メダルをもって全員集合。

(3) JICA 基金活用事業を実施したことで団体の成長につながった点・良かった点

まずは、JICA 基金を活用できたことで、以前からやりたいと思っていた「幼児支援事業」に着手できたという点が非常に大きい。JICA 担当者の方々に背中を押していただいた。実施が決まってからは、丁寧な指導のもと綿密に事業計画を立てることができたので、大きなトラブルもなく実施することができた。

JICA 担当者の方が私たちの思いをくみ取り、励まし続けてくれたことも大きな支えとなった。また当事業の内容についても本当によく把握してくださっていたので、実務レベルでのやりとりも非常にスムーズに進み、安心して取り組むことができた。本事業を通して、企画・実施する力、また関連各所と連携する力を十分につけることができたと感じる。

ご支援、ご協力誠にありがとうございました。